

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 30 日現在

機関番号：34531

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24660027

研究課題名(和文) 育児困難な乳幼児と保育者のコミュニケーションの進展

研究課題名(英文) Progress of the communication of infants and the children who are hard to take care of their child

研究代表者

門脇 千恵 (KADOWAKI, Chie)

関西看護医療大学・看護学部・教授

研究者番号：50204524

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：発達障害への関心は高まりつつあるものの専門家による診断機会は容易に受けることが出来ないという現状がある。この研究により採用された観察状況は、日常生活を簡単に頻回に観察が必要時に使用できることである。使用したビデオカメラは家庭用の安価なものを使用しています。親が子供のふるまいに熱心であるとき、親と子供は一列に座って、遊びの状況と軽食の状況の写真を撮り、専門家に意見を聞くことが推薦される。この研究は学齢未満の子供たちの個人間のふるまいの観察点を知っていて、社会的技術トレーニングに至る下準備として、非常に意味があり家庭用ビデオを使用する簡便な方法で発達障害の診断資料となる可能性があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：Preschool children with ASD were idle more than healthy children, and it was indicated that there is little several interpersonal behavior in a playing toys situation and a snack situation. In particular, turn taking was common by two situations, so may be the index most suitable for judging whether a preschool child has tendency of ASD. Joint attention, eye-contact and speaking to a parent were also indexes of a judgment. Attentive observation seems necessary for these behavior to an anxious child by a situation daily.

The observation situation adopted by this research is the situation judged by hinkai by daily life. The used machinery was a video camera for domestic use, and parents can correspond sufficiently. Therefore when a parent is anxious for child's behavior, a parent and a child sit down in line and take a picture of an idle situation and a situation of a snack as fixed-point observation by a video camera for domestic use, and consulting a specialist, is recommended.

研究分野：母性看護学、小児看護学

キーワード：社会的相互関係 ビデオ観察 自閉症スペクトラム障害(ASD)

1. 研究開始当初の背景

近年、指定規則の変更に伴い、地域における小児看護、地域における母性看護を在宅に特化した教育を行い始めている。実際に妊産婦の健康を守るだけでなく、子どもを育てる環境作りや、子育て支援、障がいのある子育て支援などを盛り込んでいる。地域において、検診場面や保育所などの母親からのサイン（育児支援、育児困難）を見逃すことなくスクリーニングができれば、より早く適切な指導を行うことができると考えた。さらに出生前診断などからの情報も病院および地域と連携しながら育児支援にもつなげていけると考えた。

自閉症スペクトラム障害（ASD）は就学前後から確定診断がなされるようになってきたが、乳児期の診断は困難である。ASD は生物学的な基礎を持つことは周知のことになりつつあるが、それを基礎にもつ社会化の進展状況と言語獲得過程を実測データで明らかにしようと考えた。

食事（授乳）時に保育者は、機械的に食事を与えるのではなく、必ず言語的働きかけと社会的働きかけを行う。また、遊びの場面にはそれらが、もっと盛んに行われる。社会的働きかけでは、アイコンタクト、あやしに対する行動、共同注視、自発的働きかけなどの社会的行動がやりとりされていると考える。定型発達では、育児者への社会的行動として、「マンマ」などの発音容易な言語が発語となるが、ASD は社会的行動の問題があり、発語は発音困難なものまで遅延する可能性が考えられる。また、母親たちは玩具を示して、「ちゃんよ、ちゃん可愛いね～」などと、名詞だけを言うわけではないが、ASD 乳児の感情語の習得が観察される。

このように社会的行動獲得の問題のある範囲と、ない範囲を明確にすることはでき、さらに言語の獲得過程や問題点を検討することができ、ASD のハイリスクをもつ乳幼児発達過程を公表することができると考えた。

2. 研究の目的

ASD を疑われる育児困難児が保育者に示すアイコンタクト、働きかけ、および共同注視の進展、また常同行為の進展を、健常発達と比較して分析する。近年、子どもや家庭をめぐる問題が複雑且つ多様化し、育児不安から我が子に虐待を加えてしまった事例なども報告されている。そのような育てにくい子どもの中には、身体障害、知的障害あるいは注意欠陥多動性障害（ADHD）や自閉症スペクトラム障害（ASD）を含む発達障害などをもつ子ども含まれていることが考えられる。

ASD 児に対する支援に於いて早期発見は重要な意味を持つ。親をはじめとした周囲の人々に児の持つ障害が発見されずに過ごした場合、児が示す「ちょっと不思議な」行動に対して周囲から不適切な対応が取られる場面が多くなる。その結果として、児に様々な情緒・行動上の問題が生じてしまうことがある。一方、早期にその障害が発見された児に関しては、児が苦手とする社会的相互作用を向上させる指導が行われることになる。その結果、その後の人生が過ごしやすいものとなる児も多い。更に、早期発見は児だけではなくその保護者にも大きな利点がある。それは、児の障害特性に対する理解が周囲の同年代の子供たちと比較した時に保護者の中に現れる様々な不安を払拭することに役立ち、保護者の心理的な負担を大きく軽減するということだ。また、学校の教員など周囲の大人に対しても

適切な対応を求めやすくなり、周囲の友人や教師との間に生じる問題を未然に防ぐことで二次障害の発生リスクも低減させることが出来ると期待される。

発達障害への関心は高まりつつあるものの専門家による診断機会は容易に受けることが出来ないという現状がある。本研究では保護者が自身の子供のことが「少し気になる」と感じた際に、客観的に自身の子供のコミュニケーション能力を把握するための手がかりとなるものを提示することを目的とする。その手段として未就学児の健常児、自閉症スペクトラム児とそれぞれの母親または父親との交流場面の観察を実施する。そして、両者の社会的相互作用のあり方を比較することにより健常児と比較した際の自閉症スペクトラム児における特異性を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 研究対象者

関東近郊に在住する就学前の健常児 11 名(男児：6 名 女児：5 名)の親子と ASD 児をもつ親の会に在籍する就学前の自閉症スペクトラム児 (ASD) 3 名(男児：3 名)の親子を対象として撮影を実施した。実験協力者の概要を表 1 に示す。

(2) 研究期間

平成 26 年 11 月上旬～平成 26 年 12 月上旬

(3) 研究場所

実験協力者の希望を伺い、その希望に沿って撮影場所を定めた。

本研究の手続きは全て平成 25 年に実施された門脇ら(2014)による「5 歳女兒と家族のインタラクション」に従うものとした。

表 1 対象児

No.	年齢	性別	撮影協力者	備考
1	3歳6か月	女児	父親	健常児
2	3歳7か月	男児	母親	健常児
3	4歳2か月	男児	母親	健常児
4	4歳8か月	男児	母親	健常児
5	3歳3か月	男児	母親	健常児
6	4歳2か月	男児	母親	健常児
7	3歳1か月	女児	母親	健常児
8	3歳0か月	男児	父親	健常児
9	4歳5か月	女児	母親	健常児
10	5歳11か月	女児	父親	健常児
11	5歳0か月	女児	母親	健常児
12	4歳1か月	男児	母親	ASD児
13	6歳4か月	男児	母親	ASD児
14	6歳1か月	男児	母親	ASD児

(4) ビデオ撮影方法

親子は並んで椅子または床に座り、お互いが見合えるように設定した。テーブルの上に置いた遊具で遊ぶ場面と、おやつを食べる場面を、三脚にビデオカメラを固定し、数メートル離れた位置からビデオ撮影を行った。

できるだけ自然な親子の相互作用を撮影するために、日頃愛用しているおもちゃを使用し、おやつに関しても普段食べているものを使用した。撮影は各々の場面を 10 分の目安で、連続して約 20 分間行った。遊具場面から撮影を開始し、遊具場面の撮影が終了してから研究者がおやつを机に差し出して継続して撮影を実施した。研究者は対象児がカメラばかりに注目しないようにする為に三脚の後ろには立たず、対象児の付近に座った。撮影時の見取図を図 1 に示す。

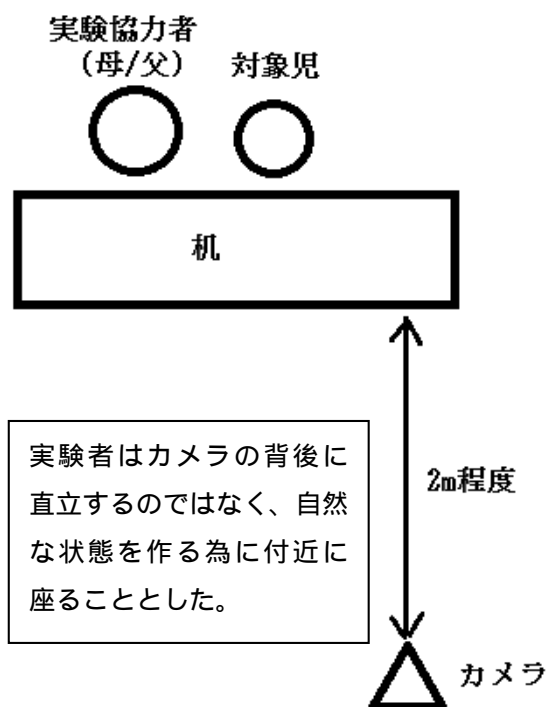


図1 撮影時見取図

(5) データ分析

実験者が、録画ビデオを繰り返し再生して、親子の相互作用がみられる行動をカウントした。観察項目の選定は、門脇ら(2014)によって定められたものを採用した。

アイコンタクト、微笑みかけ、および身体接触が対人関係を調整する多彩な非言語的行動として選定し、ものを見せる行動と共同注視とが楽しみや興味の共有を示す行動として選定し、話しかけとターンテイクングとが会話を開始して維持する行動として選定した。ターンテイクングは二人の間で互いに順番をとることであり、乳児期には母子間のアイコンタクトと吸啜反応にみられるが、今回は親からの話しかけを開始とする子どもの反応(相手を見ること、発声、および微笑)、それに対する親の反応と、子どもからの発声・微笑みかけを開始とする親の応答、それに対する子どもの応答とした。

遊びの場面では対象児がおもちゃに触れて遊び始めてから、おやつ場面では対象児がおやつに触れてからそれぞれ3分間の行動に関して計測、分析を行った。

4. 研究成果

撮影にあたり、両場面ともに離席してしまう場面が複数の対象児に見られた。これらの事態に対しては、離席して映像画面から消えた時間をストップウォッチを使用して計測し、その不足分に関しては規定された3分間に加算して行動を観察した。画面に映っていない場面に関しては、たとえ言語によるコミュニケーションが記録されている場合でもその行動は全て無視することとした。

実験者の行動採用基準に関して妥当性を確保する為に、任意の一事例に関して第三者にも行動計測を依頼した。その際、観察者間の行動抽出の一致率はおもちゃ場面で83%、おやつ場面で79%であった。両者の意見が一致しない行動に関しては再度確認し、協議をした上でその行動の分類を決定した。

本研究で得られたデータに関して健常児群とASD児群間における各項目の生起回数の有意差をマン・ホイットニーの検定にて求めた。結果として、おやつとおもちゃの両場面の「ターンテイクング」に於いて健常児群がASD児群よりも有意に多かった($p < .05$)。また、おやつ場面の「アイコンタクト」に於いて健常児群がASD児群よりも有意に多かった($p < .01$)。また、おもちゃ場面の「共同注視」とおやつ場面の「話しかけ」に於いて両群を比較した際には健常児群に有意傾向が見られた($p > .1$)。

ASD児は健常児より「ターンテイクング」の出現が少なかった。ターン取得は学齢未満の子供にはASDの傾向があるかどうかについて判断するのに最も向いている場合がある。

共同注意、アイコンタクトと親と話すことは、判断のインデックスでもありました。気を配る観察は、毎日状況によって気にかかる子どもにとって必要なものであると考えられた。

この研究によって採用された観察状況は、日常生活を簡単に頻回に観察が必要時に使用できることである。使用したビデオカメラは家庭用の安価なものを使用しています。親が子供のふるまいに熱心であるとき、親と子供は一列に座って、遊びの状況と軽食の状況の写真を撮り、専門家に意見を聞くことが推薦される。

この研究は学齢未満の子供たちの個人間のふるまいの観察点を知っていて、社会的技術トレーニングに至る下準備として、非常に意味があります。

家庭用ビデオを使用する簡便な方法で発達障害の診断資料となる可能性があると考えます。

<引用文献>

門脇千恵・佐々木和義・桂川泰典・齋藤啓子・森田智子・西垣里志・曾我部美恵子(2014) . 5歳女兒と家族のインタラクシオン 関西看護医療大学紀要, 6(1), 55-59 .

5 . 主な発表論文等

門脇千恵・佐々木和義・桂川泰典・齋藤啓子・森田智子・西垣里志・曾我部美恵子 (2014) . 5歳女兒と家族のインタラクシオン 関西看護医療大学紀要, 6(1), 55-59 .(査読あり)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

門脇 千恵(CADOWAKI Chie)

関西看護医療大学・看護学部・看護学科・教授

研究者番号：50204524

(2)研究分担者

佐々木 和義 (SASAKI Kazuyoshi)

早稲田大学・人間科学人間科学学術院・教授

研究者番号：70285352

曾我部 美恵子 (SOKABE Mieko)

関西看護医療大学・看護学部・看護学科・教授

研究者番号：10299828

齋藤 啓子 (SAITOU Hiroko)

関西看護医療大学・看護学部・看護学科・講師

研究者番号：50552106

伊木 智子 (IGI Tomoko)

関西看護医療大学・看護学部・看護学科・准教授

研究者番号：50331202

(3)連携研究者

桂川 泰介 (KATURAGAWA Taisuke)

岡山大学・学生支援センター・准教授

研究者番号：20613863